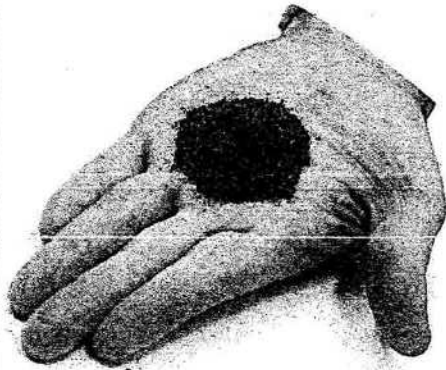


柿生文化 (第15)

平成21年10月1日
川崎市立柿生中学校
郷土史料館情報・研究誌
第15号

柿生「鉄」の系譜

鉄とともに歩んだ鶴見川文化



(麻生橋付近で採取された「砂鉄」)

校長 板倉 敏郎

鶴見川流域の柿生周辺には、「鉄」に関する地名が大変多いことをご存じの方も多いと思います。例えば「鉄町」(横浜市青葉区)、「金井」(東京都町田市)、「黒須田」(黒砂から転じたか:横浜市青葉区)、「金程」(金沢から転じたか:麻生区)「たたら川」「たたら橋」(麻生区・町田市)などです。鶴見川流域の鉄に関する遺跡もいくつか発見されています。例えば、昭和60年上麻生のアルナ園の建設現場から平安時代後期の製鉄にもちいるふいごの羽口(はぐち:送風口)や鉄滓(かねそく:鉄を精錬する時に出る不純物)が多数発見されました。

また、横浜市鶴見区生麦の安養院門前から杉山神社階段付近にかけて古墳時代の鍛冶址が発見されています。鶴見川支流の早淵川流域の緑区矢崎山遺跡からは、古墳時代のふいごの羽口(はぐち)や多数の鉄滓、そして鉄鎌(鉄ヤジリ)が発見され、鶴見区駒岡の「岩瀬横穴群」「山野横穴群」には、多数の鉄鎌や直刀が発見されています。

このように鶴見川と鉄との関係は、かなり古い時代から強いつながりがあったものと考えられます。現実、上の写真のように鶴見川では多くの砂鉄が採取されました。

鉄との関係は、考古学だけではなく民俗学の分野でも考証がなされています。民俗学者で地名研究所所長の谷川健一氏は、「麻」と製鉄との関係について触れ、その中で、「一つ目小僧」について、一つ目が、たたら(黓)師の職業病の投影であると考えられ、製鉄との強い関わりについて述べていらっしゃいます。

私見ですが、かつて「柿生文化で」紹介した、一つ目の「ミカリ婆さん」「メカリばあさん」伝説も何となく鉄との関わりを匂わしているようにも感じます。

一方、鶴見川流域に点在する「杉山神社」は、古代、大和朝廷の神事祭礼をつかさどった忌部氏と強い関係を持っていますが忌部氏の祖は「天目一箇神(あめひとつのかみ:一つ目の神)」です。この神は、鍛冶師の神でもあります。

今まで「カルチャーセミナー」でもたびたび登場した「杉山神社」「メカリばあさん」「鉄」「忌部氏」「麻生」等が全てつながりを持ちながら柿生の歴史を私たちの前に展開してくれる予感がしてなりません。

(ふいごの羽口) (鉄滓)



(横浜緑区矢崎山遺跡で発掘されたふいごの羽口と鉄鎌)

柿生のチョウ

生田中学校長 二村 俊光

柿生中学校の学区にはクヌギやコナラを中心とした二次林が残されており、四季を通じていろいろな昆虫が観察されています。特に早野地区や岡上地区は自然が豊富であり、夏休みには、親子連れでカブトムシやクワガタムシを採集している姿がよく見かけました。

今、見られるチョウは

私もこの地区をフィールドワークとして昆虫の観察をしています。今回は蝶の分布の変遷について述べたいと思います。沖縄を含めて日本全体には300種近くの種類のチョウが生息していますがこの川崎には平成10年までに51種類を確認しました。

その内訳はアゲハチョウ科8種類、シロチョウ科6種類、セセリチョウ科9種類、シジミチョウ科13種類、タテハチョウ科15種類になります。特に珍しい種類としてゼフィルスと呼ばれるシジミチョウの仲間が早野の里で観察できます。早野の里にはクヌギやコナラの他にも湿原にはハンノキ林が自生しており、特別な昆虫相を形成しています。

ゼフィルスとはギリシャ語で風の精を意味し、ミドリシジミやアカシジミの仲間が属します。6月中下旬栗の花の咲く時期に見られます。

クロノマチョウ



モンキアゲハ



アカボシゴマダラチョウ



温暖化の影響？

この川崎の蝶相が近年温暖化の影響で大分変わってきました。今まで見ることでできなかったチョウが観察できるようになりました。数年前までは関西以南に棲んでいたチョウが気温上昇のため生息域を拡大し、この川崎でも越冬し分布を広げてきたのです。

ナガサキアゲハ、クロノマチョウ、ムラサキツバメの3種類です。ナガサキアゲハは柑橘類、クロノマチョウはジュジュダマなどのイネ科の植物、ムラサキツバメはブナ科のマテバシイを食草とし、それらは庭木や畑に自生しているので生息は十分に可能です。

その他にも南方系のモンキアゲハ、ツマグロヒョウモン、ムラサキシジミも昔に比べ、普通に見られるようになりました。

外来種で分布を拡大するチョウ？

淡水魚の外来種であるブラックバスやブルーギルがスポーツフィッシング用に各地の河川、湖に放流され在来のフナやオイカワなどが激減して問題になっていますが、チョウでも同じような問題が起こっています。国蝶に指定されているオオムラサキやゴマダラチョウは共にエノキを食草として、棲み分けをしています。これらのチョウは今ではほとんど見られなくなりました。その代替えとして、同じエノキを食草とするアカボシゴマダラチョウが神奈川県では見られるようになりました。このチョウは日本では鹿児島県の奄美大島に生息していますが、神奈川県のアカボシゴマダラチョウは中国大陸産です。心ない昆虫マニアが藤沢地区で成虫を放蝶し、それが環境に適応して増えていったと言われていいます。今では岡上地区や早野では在来のチョウを追いやり、普通に見られるようになりました。今、ムシキングなどで外来のカブトムシやクワガタムシが人気がありますが飼育には十分に注意することが必要です。

21 「川崎のチョウ」

川崎で自然林の残されている早野・黒川地区を含む4ヶ所でのチョウの観察結果をまとめてみました。温暖化の影響で、ムラサキツバメ、ナガサキアゲハなど、今後種類も増えると思います。

	早野・黒川	生田緑地	東高根森林公園	多摩川河川敷	夢見ヶ崎公園
アゲハチョウ科					
アオスジアゲハ	○	○	○	○	○
オナガアゲハ	○				
カラスアゲハ	○	○	○	○	○
キアゲハ	○	○	○	○	
クロアゲハ	○	○	○	○	○
ジャコウアゲハ	○	○			
アゲハチョウ	○	○	○	○	○
モンキアゲハ	○	○			
シロチョウ科					
キチョウ	○	○	○	○	○
スジグロシロチョウ	○	○	○	○	○
ツマキチョウ	○	○	○	○	○
ツマグロキチョウ	○				
モンキチョウ	○	○	○	○	○
モンシロチョウ	○	○	○	○	○
セセリチョウ科					
アオバセセリ	○				
イチモンジセセリ	○	○	○	○	○
オチャバネセセリ	○	○	○	○	
キマダラセセリ	○	○	○	○	○
ギンイチモンジセセリ	○			○	
コチャバネセセリ	○	○	○	○	○
ダイミョウセセリ	○	○	○		
ホソバセセリ	○	○			
ミヤマセセリ	○	○			
シジミチョウ科					
アカシジミ	○	○			
ウスイロオナガシジミ	○				
ウラギンシジミ	○	○	○	○	○
ウラゴマダラシジミ	○	○			
ゴイシジミ	○	○			
コツバメ	○	○			
ツバメシジミ	○	○	○	○	○
トラフシジミ	○	○	○		
ベニシジミ	○	○	○	○	○
ミドリシジミ	○	○			
ムラサキシジミ	○	○			
ヤマトシジミ	○	○	○	○	○
ルリシジミ	○	○	○	○	○
タテハチョウ科					
アカタテハ	○	○	○	○	
アサマイチモンジチョウ	○				
イチモンジチョウ	○	○	○		
オオムラサキ	○				
キタテハ	○	○	○	○	○
ゴマダラチョウ	○	○	○		
コムスジ	○	○	○		○
コムラサキ	○	○			
スミナガシ	○				
ヒオドシチョウ	○	○			
ヒメアカタテハ	○	○	○		
ミスジチョウ	○				
ミドリヒョウモン	○	○			
ツマグロヒョウモン	○	○	○		
ルリタテハ	○	○	○	○	○
計	51種	42種	29種	23種	20種

シリーズ 「麻生の歴史を探る」 第14話

王禅寺その3 - 関東の高野山 -

「弘法の松は天下の眺、九十九谷と多摩の丘・・・」ご存知「柿生音頭」の一節です。弘法大師が植えられたと伝えられるこの周辺からの眺望は素晴らしく、幾条かの谷戸田を覆う山また山、その山並みが都筑丘陵に連なって、近くは丹沢連峰、遠くに富士、風のない日でも松籟がごうごうと天空に鳴って、誠に雄大で、私たちが小学生



弘法の松

の頃は1年生の遠足の地でした。残念なことに昭和31年12月、心ないハイカーの火の不始末で樹脂が一晩中燃え続け、それがもとで枯死してしまいました。樹齢約一千余年、尋常な木ではありませんでした。

弘法大師が高野山を開いたのは、弘仁7(816)年と言われています。前稿光が谷戸に寺が建てられたのは宝亀年間(770年)と推測されますので、諸国行脚の大師は本当に創建されたばかりの勅願寺でもあるこの寺に立ち寄ったのではないのでしょうか。八幡の森(現見晴台公園)からの眺めは、大師を釘付けにしたことでしょう。してみれば、金剛峰寺を建てるのに一谷たりない九十九谷の伝承も、お手植えの松の話も、まことのものになってまいります。

すべては真実に近い話ですが、武蔵風土記では「土人ノ伝ヘニ、イツノ頃カ、関東ノ高野山ト号セシト・・・」と述べています。

紀州高野山には延喜7(917)年、高野山第三世無空上人によって王禅寺の堂塔が立派になったと記録が残っているそうです。そしてその時、人皇60代の醍醐天皇より山号、寺号と封戸3千戸を賜ったといわれ、ここで初めて王禅寺が誕生することになります。堂塔が立派になって、光が谷戸の寺(古王禅寺)は法灯を新王禅寺に移し、廃寺となっていきました。寺があったと思われる敷地は、光が谷戸から百合ヶ丘3丁目、あるいは高石に及ぶ地域とも考えられますが、礎石も瓦も発見されていません。そうすると、鶴見川豪族の建てた寺は、掘立柱に草葺きのお堂のようなものだったのではないのでしょうか。光が谷戸の近くに「塔の越し」という地名があります。寺が移転するとき、塔だけ残しておいたという伝承があり、新しい堂塔は現在の王禅寺の地に残されたと思われま。

それにしても封戸3千戸とは大変な寺領です。延喜17(917)年という、この地方では、前稿「石川牧」の頃、律令制度の下、苦しい庶民の信仰を集めての寺だったと思います。そして中世この寺は、鶴見川流域の大場、市ヶ尾、荏田を中心に三十六ヶ寺の末寺がありました。現在も法灯は受け継がれ、寺の歴史を今に伝えています。

文、小島一也氏



末寺荏田真福寺観音堂
(釈迦如来像は国の重要文化財)